

〔翻 訳〕

日本協会会員・法学士 (東京) 志立鉄次郎*1)

柔 術*2)

—からだの早業による古来の護身術—

小 野 勝 敏 (訳)

私がただいま短時間にお話するつもり演題につきまして、奇をてらう意図がまったくないことを、即座にご理解いただけたら幸いです。

私は、せいぜい柔術に関しまして、幼児期より教えられてきた事柄を思い起こして、再演するように努めることしかできないのです。

私が望みますことは、この話が進むにつれて、皆さんに私の恩師の名前すなわち柔術をご紹介できる機会に恵まれることです。

柔術は紳士であります。近年、柔術は新しい組織のお陰で、かなりの名声を得ていて、その再生と復活は熱心な柔術家によるところ大なるものがあります。

皆さんは、柔術に関して何かを聞いたり、見たりした経験があるかもしれませんが、私の推測を思いきって申し上げれば、未だに柔術はよく知られていないのです。

なぜならば、私の知るかぎりでは、柔術についての英語の書物が一冊も書かれていないのです。

数年前、日本アジア協会によって数篇の論文が上梓されたことは承知しています。しかし、書物は一冊も出版されていないのです。

ですから、この題目についてできるだけ平明に、ごく自然に説明することが私の意図するところです。

第一に、私が挙げたいことは、柔術の起源と発展に何らかの歴史的な評価を与えたいということです。

第二は、過去 10 年間に柔術がいくつもの現実的な実演をしながら発展してきた

中での一般的な形態と特徴を表明することです。

そして最後に、この武術にまつわる著名にして古来の師範たちに関する二三の物語を付け加えたいのです。

封建制度の下では、日本のサムライ階級の間で弓矢、刀、乗馬、槍、その他の武器を使用するようないろいろな軍事的技術が盛んでした。これらの武術は、おしなべて、多かれ少なかれ全ヨーロッパの国々でもたしなまれています。つまり、これらの武術は西欧の世界においても卓越していて、決して劣ることなく実践に使われてきました。けれども、武術の形態と方法は日本のそれとまったく異なっていました。しかし、私の信念によれば、相手の力を利用することによって、勝利を得るといふ独特の技——今、私がお話しようとしているのはこの技のことですが——、この技術こそ日本固有のものであり、いかなるヨーロッパの国においても実践に使われたりしたものとは、まったく別個の技術なのであります。

かつて私は、ヨーロッパの古来の軍事的技術を調査し、日本の柔術にそっくりなものを期待して見聞する機会に恵まれました。しかし、そっくりなものは見当たりませんでした。レスリングこそ柔術に比肩しうるとおっしゃる人もいます。けれども、柔術は実にまったく異なったものであります。すなわち、レスリングは、力による勝利を目指しています。柔術は、相手の力を利用することによって、勝利を得るものです。柔術という言葉の意味は、よく知られているように、柔らかい術なのであります。柔術は、本当に柔らかい術ですし、力に逆らわないことによって勝利を得る武術と定義することができます。

講演の題名として幹事のディオズィ (Diósy) 氏^{*3})から示唆され、「からだの早業」という表題を私は採用しましたが、この着想は他のいかなる表現よりも容易に伝達されるように思えるのです。

この種の武芸として柔術は、日本でごく普通に知られている名称ですが、「やわら」、「体術」、「白打」、「小具足」、「捕手」などのような名前がよく似た武術にときどき適用されます。

柔術の真の起源は明確ではありませんし、その上、柔術が最初に存在したという明確な日付もはっきりしないのですが、それが純粹に日本の武芸であり、またどなたかが信じるように、中国から伝来したものではないということも疑う余地がありません。

陳元贊 (Chin Genpin) という名前の中国人の僧侶が拳法の技術もしくは「蹴る、打つ」の技術を日本にもたらし、福野、磯貝、三浦という名前の浪人にそれを教え、3人はそれぞれ工夫を凝らした後に、三派三様の柔術の道場を設立したことが、一般に信じられていますし、どなたかがおっしゃる伝来説の根拠なのです。

ただいま紹介しました中国人の僧侶は、中国の明王朝の末期に起きた動乱から逃れて1659 (万治2) 年つまり明王朝が崩壊したその年に日本に渡ってきたというのが事実なのであります。

陳元贊は、尾張地方で数年間の活躍をし、日本の僧侶たちとともに幾篇もの詩作をして、1671 (寛文11) 年に同地で亡くなりました。

彼の墓石は、名古屋の建中寺*4)の墓地で見られました。私が恐れることといえば、彼の墓が最近の大地震*5)で破壊されてしまったかもしれないということです。

彼が拳法の知識を有し、日本の柔術の進歩にある程度の刺激を与えたということはありません。

しかしながら、陳元贊が柔術の技術を日本に初めて紹介したなどということは、まったく信じられないことです。

第一の理由は、彼によってもたらされたといわれる中国の拳法は、日本の柔術とはまったく異なった代物だからです。

第二の理由は、日本では柔術によく似ているいくつかの武術を、陳元贊の時代より以前にその足跡を求めることができるからです。それどころか当時は、中国の文明が現代のヨーロッパ文明と同様に高い評価がなされて、柔術として人気を得るために、柔術の起源が中国に帰せられたのはありうることです。

ほかの多くの武術や慣例においても、同一の例が見られます。つまり、その起源が中国に帰せられるのです。それらの起源や慣例が、発生と発展において完全に日本に存するにもかかわらずです。

私が、この場を借りて付け加えることをお許しいただくとすれば、柔術の歴史に関する書物は少なく、その上信頼できないということです。

武術諸流派の秘伝書はたくさんありますが、それは師匠によって秘密に保存され、その内容を漏らさないという誓約の下に、特別な免許皆伝者にのみ伝授されるのです。

それらは、想像に値するほど値打ちのあるものではありません。というのは、秘伝書は矛盾していて、陳腐なものだからです。それでも私には、彼らの秘密にして

いる資料はとても興味深く、武術の歴史に大きな灯を投げかけているのです。

柔術のいろいろな流派を列挙することは、私の力に余るのですが、高名と考えられている二三の流派についてのみ述べてみます。

世間に現れた何百という異なった流派の中で、最も古いのが1532(天文元)年作州の住人・竹内久盛に起源を発する、といわれる竹内流です。この日時は余り信用できないし、この流派は、小具足または捕縛術を教えました。けれども、柔術の真髄とはどこかが何となく違っているのです。ですから、陳元賛の渡来以前にいつの間にか柔術の基礎ができしかも、柔術によく似た武術を教えるための主要な流派とみなされていたかもしれません。

次にくるのが起倒流という流派、丹波の住人・福野七郎右衛門で、およそ17世紀中葉(寛永)の頃です。この流派に近い直信流というもう一つの流派があります。その創始者は寺田勘左衛門といい、雲州の住人で福野と同じ時代の人です。この2人には、多くの論争の余地があります。ある伝書によれば、福野を寺田の師匠としているし、他の伝書では、寺田が福野に教授したとなっている。私は、この伝授の見解を決定することはできませんが、私が確かに主張できることは、福野と寺田の双方が17世紀の半ば頃、お互いに親しく関わりあいながら、陳元賛の時代よりさかのぼること数年前に柔術の異なった二つの分派を設けたということです。両者が陳元賛という僧侶に会ったり、噂を聞いたりしたことはありうることです。このようにして、中国の拳法についての何かが知られていったのでしょうか。結局、これら二つの流派は、柔術諸流派の最古参のように思われます。

扱心流は、近江の犬神永勝によって創設されました。その創設の時期は不確かですが、この流派が起倒流の流れをくむ分派であると信じられる理由があります。創始者の孫にあたる犬神郡兵衛は、自身の武術によってたいへんな名声を得たので、この流派の真の創設者として正式にみなされるようになりました。

関口柔心により始められた関口流、洪川伴五郎による洪川流も共によく知られた流派です。この二派も、後者の洪川伴五郎が関口流の息子の下で修業したので、両派とも近い関わりを有しています。一方の九代目と他方の八代目がそれぞれ、現在東京で活動しています。

楊心流¹⁾もしくは三浦流と天神真楊流もまた重要な流派です。これらの流派は共に、日本で一般に知られています。両派が国中に広まった理由の第一は、彼らの教える方法が簡潔で分かりやすく、第二に、最近の革命時に、最も注目すべき著名な

人物たちが東京で隆盛を極めて、二つの流派に属していたからです。一方、他の流派の教義は正しかったのですが、地方に隠遁しました。6年前に没した楊心流の戸塚彦助*6)は、柔術家として出現した驚くべき人物でした。現在に近く、よく記憶されているもう一人の有名な師範は、30年前(文久3年)*7)に亡くなった磯又右衛門でした。彼は、最初に楊心流を研究し、東京のお玉ヶ池で独特の天神真楊流を設立しました。彼の名声は国中に広まっていたし、彼こそ柔術が生んだ最大の人物でした。これらの流派が、東北や関西から伝播したのではなく、日本の中心部に生じたことはまことに注目に値します。

私は、今まで最も有名な流派のいくつかについて述べてきました。私は、余りにも多くの命名学的な分類に耽り過ぎたのではないかと心配ですし、とても奇妙に聞こえたかもしれません。ですから、一つの流派を除いて、多くの名称を述べる気にもならないのです。最近10年間に頭角を現したその唯一の流派は、余りにも驚くべき名声を得てしまったので、ほかの流派が価値と影響の面でそれを凌駕できないのです。

私がお話したように、柔術の諸流派は、家光公の時代の封建主義の下で育ってきました。家光公は、徳川家の第三代将軍で最も頭が良く、彼の治世の下でわれわれの封建主義は完全に確立されました。柔術は、いろいろな地方で18世紀の後半まで、流行りつづけ、封建主義の不吉な崩壊とともに下降線をたどりました。明治維新となり柔術は力を回復しました。しかし、新しい時代の精神に何らの影響力も持たなかったし、封建主義の崩壊とともに、無用の長物になり下がり、まさに風前の灯火でした。もし柔術が忘却のかなたに完全に押しやられていたら、驚くべき成功とそれを再建し、再興する手立てはなかったでしょう。

私は、今日では柔道と呼ばれている柔術に関して何らかの知識を授けて下さった恩師を紹介する機会にたどりついたようです。

その方は、嘉納治五郎・文学修士(東京)、日本の有段者会の会長です。先生は、最初に天神真楊流を、後に起倒流を学びました。これらの流派を完全に習得したのちに、先生は、ほかの諸流派について調査と比較を行い、最終的に、嘉納流もしくは一般に呼び慣らされている講道館柔道を創ったのです。柔道という言葉は、珍

奇なものではありません。それは、昔の諸流派の一つによって使われていました。それは、柔順あるいは従順が根本原理の修養主義といえます。

嘉納流は、柔術を参考にして柔道という言葉を採用したのです。と申しますのも、それが身体的活動だけでなく、道徳的かつ知的な訓練としても修業されるからです。古い形式の柔術では、単に闘争の目的のみが追求されたのに対して、嘉納流の新しい組織では、身体のみならず知的な能力も開発させようのです。古い諸流派が、実践以外に何も教えなかったのに対して、現代柔道では、教義の論理的な説明をし、同時に実践にも重要な価値を与えているのです。

嘉納流では、すべてのコースが有段者と無段者の二つに分けられています。技量の程度に応じて進級する10段階があります。無段者は、A、B、Cの3段階に分けられます。すべての無段者は、C級に入り、そこから徐々にBからAへと昇級し、ある技術を習得したのちに、初段になることが認められます。彼らは、初段から、一段ずつ六段まで昇ります。六段は、実際の技法の最終の段とみなされています。六段以上のすべての高段者は、主に精神的な教養が問われます。これは、全組織の中で最も深淵の部分です。未だに誰も十段に達していませんが、毎日、一定の精神的修業をしても、達成するのに10年を要すると考えられます。

東京には、嘉納先生が指導をする、二つの大きな道場があります。毎日午後になると、10歳から20歳までの多くの青少年が、首都の全地域からそこに集まり、たいへん熱心に、完全な秩序を保って、暗くなるまで稽古をします。その目的にふさわしい広大な道場へこれらの都会っ子が行って、技術を磨くことは、毎日の主要な娯楽なのです。弟子たちを評価したり、発奮させるために、周期的にいくつかの試合が開催されます。彼らは、無料で教えられ、柔道着以外は一銭もかかりません。生徒たちは、入門を志願するときには、規則を守る誓約をしなければなりません。講道館は、今日ではとても有名になったので、嘉納先生の直接もしくは間接の指導で学ぶ生徒は何千人にも及びます。東京の警視庁では、すべての巡査が柔道の訓練を義務づけられています。日本の警察官は、柔道を習っているお陰で、体が小さくても犯人を捕まえることがとても上手です²⁾。多くの公立と私立の学校で、柔道の本当の利点を認識するようになってきました。海軍兵学校、第一・第三・第五高等学校、学習院（貴族の子弟の学校）、慶應義塾（福沢諭吉の創立）および帝国大学は、嘉納や高弟によって教えられる主なところ です。

図1 真捨身投



「取」は、背中を地面につけて、「受」の下腹部に足を当て、自分の頭方へ投げる〔巴投——小野注〕。

(注) 4枚の柔術の挿絵は、イサヤマ (R. Isayama) によって、日本協会のために特に図案化されたものである。取は、黒い着物を着ている。受は、取りに対して柔術の原理に反して、手の指を広げていた点が注目に値する。

勝ち方には例えば、投技、抑込技、絞技、関節技などいろいろな技があります³⁾。多くの異なった教則がそれぞれの技にあります。体幹、腕、手、足のすべての動きと状態が、教義の法則と原則に一致すべきです。投技の根本的な原則は、相手の自然な姿勢を崩し、重心を体外に移行し、腕と足の働きで、自然に投げ飛ばされるようにします。絞は、襟をつかんでもつかまなくてもよいのですが、手や腕で、前や後方から絞めても有効です⁴⁾。抑込や、腕、脚、指の関節を決めることは、同様の方法でなされます。

活法や蘇生術は、絞められたり、急所を打たれたり、息が止まったり、溺れたり、仮死状態に在る人の意識を取り戻すための方法です。ある流派では、これを秘密としているが世間一般に隠す理由はなく、ある一定の段階に達した弟子のみに教授します。活法というものは、一般に信じられているような高等な教義ではありません。

図2 背負投



「取」は、相手の肩の襟を、「受」に背中を向け、膝を曲げて両手でつかみ、肩越しに受を前方に引き揚げて投げる〔1本背負投——小野注〕。

窒息していると思われる人の意識を回復させる方法の一つに、掌の下部で、背骨の部分を押する方法があります。もう一つは、後方から下腹部に手を組ませて患者を抱き、自分の身体のほうに引き揚げます。その他は、より複雑な方法でなされます。これらの技による通常の稽古のほか、勝利を得るのに役立つ一連の規則と型がからだの各部分の異なる動きについて教えられます。これは、勝利を得ることを

図3 絞 技



「取」は、「受」の背後より、相手の喉に両腕を交差させ、手は着物の両襟を握り、しっかりと絞める〔送襟絞——小野注〕。

目的として構成されました。普通、2人で組んで稽古をしますが、同時に何人でも組み合って行うことができます。必要ならば、音楽を流してもよいでしょう。一般の学校においても、男女が柔術を体育として学習できるように採用することができます。

模範演技によって、皆さんに柔道の一般的な形を披露することが、私の願いです。

た。しかし、残念ながらいくつかの障害によって中断を余儀なくされました。私の未熟さが主な要因ですが、その他にも、適当な場所、相手、柔道着などが得られなかったからです。呉氏のお許しをいただき、柔道を余り実践していない人と完全な乱取りを行うことを避けたい、ということです。相手が不完全ですから、実例によって、いくつかの形をお見せしましょう。

柔道の目指すところは、体、徳、知の稽古で、いずれも同等で重要であると確信しています。からだの成長にどのような効果があるかは、申すまでもないことです。毎日、学校に登校し、精力的に稽古をするのは本当にすばらしい運動です。

これから、柔道と徳と知の関係について、少し述べてみましょう。

歴史的に考えると、はっきりしていることは、柔術と他の軍事訓練が、古い武士精神の維持にすばらしい影響を与え、日本の封建時代を通じての社会道徳をいかに良く維持していたかは注目すべきことです。この時代は、その目的にかなう宗教が誕生していない時代でした。仏教と神道がありましたが、その実際的な影響は大きくありませんでした。それどころか、宗教は日本の支配階級に、ほとんど有益な効果を持っていませんでした。事実、サムライ階級の道徳は、疑いなく、すべての人々の模範であり、武士精神に存します。この武士精神とは、柔術と軍事訓練により、直接または間接的に生まれ維持されてきました。ですから申すまでもなく、封建時代の社会道徳は、これらの武術によって高く保たれていました。繰り返しになりますが、近代柔道の根本的な目的は、広い意味で人間をより高い基準に引き上げる教育そのものであります。人類の性格を型作る原因は何でしょうか？ もちろん自然はそうです。自然力が、ある人を他の人と異なったタイプの人にすることは認めます。バックル (Buckle) がその著書『文明の歴史』(History of Civilisation) の中で、本性の影響について何らの注意も払っていない、と非難している精神分析の評論家たちに賛同します。しかし他方、忘れてならないのは、近代文明が人間性の上にすばらしい力を得て、芸術と科学が、自然の力の足りないところを徐々に満たし、教育が人格に非常に大きな影響力を行使するようになり、本性の力を破壊しそうであります。柔道の主な目標は、この点にあります。人間の力、道徳、知性を人の手段と努力によって増強することを求めています。それは若者を習慣的にかつ偉業をなすための誘因条件としてトレーニングをさせる傾向にあります。柔道のより高い部分に触れることは、私の力の及ばないところですが、目指している道徳の

特性を掘り下げてみましょう。尊敬と親切、忠実さと誠意は、疑いなく柔道を学習するものが注目すべき根本的な視点であります。日頃の稽古では短気が私たちの最弱点の一つであり、人生においても気短さは避けなければなりません。なぜなら、短気は相手に、つけている隙を与えるからです。どんな緊急の場合でも、イライラすることなく、絶えず平然かつ冷静であることは、柔道の第一原則の一つです。慎重さ、用心、節制、辛抱、危険時の即断、分別能力、熟考後の決断、節度を持った動き、自負心、自制——これらすべては、まさに、柔道の学習によって体得されるものです。心の広さ、義務への従順さ、それに浪費を慎むことも、非常に注目すべき重要な点です。私たちが柔道原理を学び、習得するとき、いかにこれらの徳が楽しまれ利用されるかを、自然に理解できるようになるべきです。

柔道が知力に及ぼす影響も同様に重要であります。厳しい注意を日常の義務に払わなければならないことが認められます。私自身のことを語るのは控えますが、私が柔道を学ぶことによって得られる集中力と観察力は、確かに、稽古によって養われる主な知力の一部であります。これらのほかに、創造力、思索力、調査力、分類力および他の同類の理性的能力は、柔道の学習によって発達されるべきものです。

このように急いで、柔道が道徳と知力に対して持っているいくつかの関係について示してきました。身体的運動、健康、自己防衛、自己保護などを享受せしめてくれるばかりでなく、知的能力と同様に道徳も養い活気づけるのであります。

昔の柔術の有名な師範に関しての話を二三して、この紙面を閉じたいと思います。

雲州にイノウエ (Inoue) という一族がおり、代々直信流の師範をしていて、封建時代には、領主から若いサムライを教えた褒美としてある一定の石高を受けていました。代々の徳により師範として尊重されていたにもかかわらず、ある時期の一族の長は、柔術に余り勝れていませんでした。同時期に、一握で硬い竹を握り潰したといわれる、ものすごく力のある家臣 (Courtier) がいました。イノウエが殿様より、この家臣と力比べをするように命じられました。家臣は、渾身の力を込めて、後方よりイノウエの胸を抱き締めました。哀れなイノウエは、柔術に余り熟練していなかったので、相手の恐るべき力に耐えられなくて、真っ青になり意識を失いかけてしまいました。殿様は、その助けようもない状態を見てカンカンになり、立ち去ろうとしました。おそらく、俸禄を召し上げようと思ったであろうが、そのとき、柔術にかけては、イノウエよりは遥かに上手であったツチヤ (Tsuchiya) と

いう弟子が、老師匠の危機を見て、殿様を押し止めて申しました。

「お願いですから、もう少しいてください。師匠のイノウエは、きょうは、余り調子が良くありません。ですから、私が代わりに勝負をすることをお許しになってください。」

この願いを聞き届けた殿様は、再開をお命じになりました。その怪力男は、イノウエにしたと同じ方法でツチャを抱き締めました。

ツチャは、

「おまえには、これだけの力しかないのか？」

といました。この詰問に対し、家臣は、もっと強く抱き締めました。ツチャは、同じ質問を繰り返しました。その男は、少し手を緩めて、新たな力で抱き締めなおそうとしました。その瞬間、ツチャはからだを低くし、相手の襟をつかみ、肩越しに地面にドスンと投げつけました。師匠のイノウエは、殿様から咎められる代わりに、弟子の技量について大いに誉められました。

明治維新の頃、東京に老柔術家がありました。年にもかかわらず、柔術にたいへん勝っていました。この老師匠のもとに、郊外の土手に毎夜、暴漢が現れ、ふざけながらも巧妙に歩行者を投げ飛ばしている、という噂が届きました。ある夜、このいたずら野郎が誰であろうと懲らしめる決心をして、変装してその場所へ行きました。すると突然、後ろから抱き締められ投げ飛ばされそうになりました。その瞬間、からだを沈めて相手の腕をふりほどき、肘で鳩尾を打ちました⁵⁾。暴漢が死んだように崩れるのを見とどけ、気づかれないように素早く帰宅しました。次の朝、一人の弟子がやって来て、かなりの悲しみと悔いをもって、次のような話をしました。

「私は自分の能力を試すために、毎夜、郊外で歩行者を投げ飛ばしていました。昨夜も、いつものようにそこにいました。すると、ヨボヨボの爺さんが私の方にやって来たので、後ろから抱きかかえて、投げ飛ばそうとしましたが、さにあら

図4 老柔術家と暴漢



……肘で鳩尾を打つ…… (14 ページ) *8)。

(注) [絵柄にある] 柳とは、柔術・柔の術の象徴であり、「楊心流」という高名な流派に使われている。

ず、私は鳩尾を打たれ、すぐに倒れてしまいました。かなり時間がたってから、意識を取り戻し無事に帰宅しました。幸いにも、胸にポケットミラー⁶⁾をしまっておいたので、死にいたりませんでした。』

その老柔術家は、弟子を投げたのは自分である、ともいわずに弟子のいたずら行為を厳しく戒め、今後そのような馬鹿げたことを絶対にしないようにと諭しま

した。

ここまで私は、この興味深い主題の重要な特色を、非常に簡単で不完全な仕方
で列挙してまいりました。最初に、柔術の起源と八つの主な流派の名称を挙げて述
べ、次に少し、近代的な形の一般的な見解を、道徳的、知的文化との関係を示しな
がらお話してきました。このように柔術つまり柔道は、どのような意味において
も、人に傷を負わせるために学ぶような術ではありません。柔術の悪用によって、
他の人々にいかなる害といえども与えることは、教義に反し、実にひどい許すこと
のできないことです。それは、実目的で応用できる教育システムの一つとして
見られるべきです。

私の話がお聞きの皆さんをガツカリさせたかもしれないことを懸念しています。
今回、許された時間内に詳細で、専門的な細部の話に入ることはできませんでした
ので、日本協会の都合がついたとき、喜んでもっと満足のいく説明をさせていただ
くつもりです。長くお引き止めしてしまいましたが、最後までご静聴ありがとうございます。

[次の文章は、志立の実演の「受」を務めた呉大五郎*9)の短いコメントの
紹介である。この呉のコメントは、志立が柔術・柔道に関する各種用語な
どを板書しているときに、受を引き受けた経緯などについて、フロアーに
語りかけた談話である(小野注)。]

総会で呉幹事は、柔術の講演者の実演の助手を務める際に、次のような挨拶をし
ました(『日本協会紀要(原文は英文)』編集者の談話(小野注))。

講演者・志立が技術用語、日付などを黒板に板書している間に、私たちが実演を
準備するときにぶつかる困難について、少し語らせていただきます。

難しいことは、イギリスに滞在している日本人の友達の中に、柔術に精通した人
を確保し、その人と稽古をすることです。私は、ここにいる誰よりも未熟ですが、
幹事の一人として、約束された実演をできるかぎり良いものにするために、自分を
犠牲にしなければなりません。犠牲にすると申しましたのは、絶えず、志立氏に投

げられたり、絞められたり、おそらく殺されたりするかもしれないからです。実演をすることは、快い仕事でも威信を保つための仕事でもありません。日本協会の幹事の任務を引き受けたとき、このような義務を背負わなければならないとは、夢想だにしませんでした。しかし、現在は思いきって最善を尽くしたいと思います。私にとって協会の利益になることは、大きな喜びであるからです。

したがって強くお願いしますが、ここまでの私に関する演技の不完全さをお許しください。そして、協会の利益のために生贄になる幹事を哀れんでくださるようお願いいたします。

〔次の文章は、志立の講演（1892年4月29日）後の1892年5月7日に『サタデー・レビュー』（*The Saturday Review*）に掲載された「柔術」（*Ju-jitsu*）というタイトルの記事である。筆者は不明（小野注）。〕

注意——創立総会で発表した私の柔術についての論文は、イギリスの新聞に多くの反響を呼んだ。これらの評論で最も注目するのは、1892年5月7日の『サタデー・レビュー』の「柔術」という題の記事である（この注意は、志立の作成——小野注）。

『柔術——からだの早業による古来の護身術』は、先週の「日本協会の創立総会」での講演テーマであった。おそらく運動家の好みを尊重して、東京の法学士・志立氏は、この比較的知的でないテーマを、芸術協会のホールの余り適していない雰囲気の中での講演として依頼された。志立氏は、柔術を「からだの早業による護身術」で、「譲ることによって勝利を得る術」であると説明した。なぜなら、これら回りくどい表現が、まさに率直に柔術の真意であるからである。しかしながら、彼の実演を見て、私たちは、柔術とはわれわれのいうところの古き良きレスリングを完成に導いた型のものである、と確信する。

実演といえば、志立氏とその友達で観客に演技をした呉氏がタキシードを着ていたために、投げに新たな魅力が加わり楽しいものになった。

呉大五郎氏は、ユーモアたっぷりに、柔術には無知で、自分が幹事をしている協会の利益のために、自分自身を犠牲にしていつも投げられる運命にある、と説明し

た。彼は、にこにこしてユーモアにあふれた演技をし、まったく自意識などというものはなく、賞賛の域を超えていた。イギリス人の方は、逃れることができずぶざまな姿に見えた。しかし、呉氏の方とはいうと、胸元の乱れもなく冷静そのものだった。

柔術に関しては、〔ロンドン万国博覧会における〕日本村や他の場所でもっと勝れたものや劣ったものを見ることができる。志立氏は、疑いなく、公平なアマチュア柔道家で、彼の体重は、まったくヨーロッパ人に匹敵する。講演者としての彼は、私たちにとって何か新しいものがあるか、柔術の中に非常に東洋的なものがあるのでは、ということ误解された——つまり、日本の柔術には、絞めと絞めで落ちた人を回復させることを含んでいると思っていたからである。

投技は、一般的であった。志立氏がとくに日本的だと思った投技を、彼は真捨身技 (Straight body throwing) と呼んだ。その投げ技は、袖を握って、自分の足を相手の下腹部に置いて、自身の臀部を床につけ、頭越しに力強く投げる。この技は、実は単純な型として、ヨーロッパのレスラーに知られている以上のものではない。志立氏が落ちていた呉大五郎氏を頭越しに投げたときのように、非常に未熟でのろい相手との勝負では、首が折れそうになるかもしれない。しかし、それを見ていた西洋の三流レスラーの目には、ただの投げと映ったであろうことは疑う余地のないものである。

志立氏の講演にはやっかいなことがあった——というのは、彼の英語の語法は良かったけれども、舌が思うようにまわらず、日本式の発音になっていたからである——が、しかし、柔術が大いに歴史と関わっている、と思えた。

いろいろな流派があり、ぞっとするような誓いの許可を得た「完全な者」のみに秘伝が明らかにされる。有力な流派は、柔術の二つの著名な流派の子孫の縁組によって作られたように思える。

私たちは、条件付きで、誤っていたら直してもらうことにして、再度語らせてもらう——「からだの早業」は、一般の体操、水泳などのトレーニングを含み、からだ十分に鍛錬されたときにのみ教えられるように思える。これよりもっと愚かなシステムについて、何回も聞いたことがある。志立氏の名誉ある師範の流派が長く栄えることを望むものである。

〔次の文章は、上に紹介した『サタデー・レビュー』の記事に対する志立鉄次郎の反論である(小野注)。〕

この記事は、『サタデー・レビュー』の編集部に関係した、イギリスでよく知られたスポーツ評論家のペンによって記事にされたように思えます。『サタデー・レビュー』のような権威者の評論に、たいへん名誉を感じるが、大きな誤りを犯していることを指摘せざるをえません——柔術とレスリングは、同じものであるとされている点です。私は、論文の中で、柔術をイギリスで理解されているレスリングと完全に区別して扱いました。にもかかわらず、この記者は、「古き良きイギリスの言葉『レスリング』を完全に柔術と解釈できる」と自信をもって述べました。

不慣れな目には、柔術とレスリングは、非常に似たように見えるが、同一視することは、南の暖かい国からやって来た女性が、雪を初めて見たとき、綿と間違えた誤り以上に愚かなことです。これを証明するために、この評論家はこう続けました。

「柔術には、われわれイギリス人にとって何か斬新なこととか、非常に東洋的なものがあるはずだ。もしくは、日本でいう柔術の中には、絞めや絞めで落ちた人を回復させる技が反則技でなく、組み入れられているのだろう、という間違った考えを持っていました。」それから、「柔術に関しては、日本村やその他の場所で、もっと勝れたものや劣ったものを見ることができる。」

もし私が、日本語と同じくらいに、イギリスのレスリングについて知らなかったら、この主題を詳しく述べたり、柔術がレスリングとは別のものである、と説明できなかつたでしょう。もちろん、この国のどこかで、日本の柔術は紹介されてきたが、今までのイギリスでは、私が論文で説明したことを例証するための試みが何もなされませんでした。『サタデー・レビュー』の記者がロンドンの日本村で見たものは、三流の柔術家の演技で、柔術とは何の関係もありません。

私は、イギリスのレスリングを見たことがあり、日本の格闘技(相撲であり柔術ではない)に似ていることが分かりました。

相撲は、『レビュー』の主張のように、絞めとか絞め落とされた人の回復を含んではいません。もちろん、技術はレスリングに必要なものであるけれども、最も基本的なものは力です。柔術に関しては、力はほとんど重要でないばかりか、完璧な技には大きな支障にさえなります。レスリングが、主に力によって勝利を得ること

を目的にしているのに対し、柔術は、力にまったくたよらないで勝利を得ることを目的にしているということは、両者の注目すべき違いではないでしょうか？

もし、柔術に力が必要ならば、日本でよく見られるように、10歳の少年が、年が倍もあるような相手と非常な器用さをもって、稽古をすることが可能でありましょうや？ 体重が8ストーンで、巨体の14ストーンまたは19ストーン*10)もある格闘家に対して、どのように挑み、如何にうまく戦うかを完全に理解している若者がたいへん多くいます。これらの格闘家は、若者たちを何の苦もなく頭上にあげ、羽つきのように空中に投げあげることもできます。しかし、このはっきりとした力の違いにもかかわらず、しばしば若者が格闘家たち以上の相手になることもあります。そのような巨体の格闘家の手から、自分を守ることを知っているだけでなく、投げられたときに相手をどのように殺すかも知っています。

格闘家が、柔術に精通したものを投げ、その相手に少しも危害をあたえることができずに、自分の命が危うくなった例はたくさんあります。

私が、「ストレイト・セルフ・スローイング」(Straight Self-Throwing)もしくは「ストレイト・イールドィング・スロー」(Straight-Yielding Throw)と呼んだ投技に、力点を置きませんでした(真捨身投——私の論文に挿絵を描いてくれたイサヤマ氏の図1を参照あれ)。

私は、真捨身投を柔術の高度の術とみなしていません。レスリングにも、同型の投技のあることをよく知っています。もし、レスラーがこの投げ技を使ったら、相手の「首の骨を折り」かねません。しかし、柔術に精通したものは、相手に少しの危害や痛みもあたえず、服装も乱さないであります。

柔術とレスリングには、はっきりとした原理の違いがあります。そして、この違いは、どんな公正な観察者にとっても明白です。

日本では、毎日、何百人もの生徒が柔術を練習しています。通常、余り広くない——24フィート×36フィート*11)くらいの部屋で、同時に12組以上が練習をします。しかし、何年も負傷者が生じたこともなく、ほんのちょっとしたかすり傷もまれです。なぜでしょうか？ 力にたよらないのではなく、物理学的な法則と現象に逆らわないという根本原理に基づいているからです。

私は、創立総会で、「受」をしてくれた呉幹事とともに柔術のいろいろな形を披露する喜びを得ましたが、私たちの燕尾服は少しも乱されませんでした⁷⁾。この結果は、疑いもなく、一部は呉氏の腕前の良さもあるが、少なくとも柔術自体の長所

に起因しているといわなくてはなりません。

生徒が何時間も練習をして打撲をしないことは、不思議なことではありません。シャツの胸や襟、ネクタイ、袖口を乱さずに、数分でも格闘できるでしょうか？

私の論文に敬意を表してくださった評論に対し、『サタデー』の記者に感謝しますが、「レスリング」が柔術の「完全な訳」とする主張に、より深い考えを加えることを請いたいものです。

日本では、多くの少年が、柔術の原理にしたがって、上手に練習をしています。この事実は、まさに体育の実技指導のシステムに応用できることの証明になります。私は、柔術が、母なるスポーツ・レスリングの陳腐で次元の低い型として受けとられ非難される代わりに、より高いレベルに到達された教育界の皆様の間で注目されるものと信じております。

1892年12月 ロンドン

日本協会会員・法学士(東京) 志立鉄次郎

〔原注〕

- 1) 図4を参照。
- 2) ラッドヤード・キプリング (Rudyard Kipling) は、『タイムズ』(1892年6月2日)の「東のはずれ」(The Edge of the East)で、横浜港でのイギリス人水夫について、次のような記述をした。

「……水夫は酔っていて、警察官にぶつかり、近くの水路に突き倒し、尋問にシャッキリで答えた。その上水夫は、警官に不平を申し立てた。警官は、逃げ出した水夫を滞在超過などの理由で領事裁判所に連れていけば、1人につき1ドルがもらえた。水夫のいうには、日本の小さい警官たちは、わざと船に連れ戻さずにかくまい、それから——彼らは100人ほどで誰もが猛者で、恐怖の柔術で投げとばす——裁判所に連れていく。」
- 3) 図1、図2を参照。
- 4) 図3を参照。
- 5) 図4を参照。
- 6) 磨かれた金属製のもの。
- 7) 3ページを参照*12)。

〔訳注〕

- *1) 筆者・志立鉄次郎の履歴と柔道歴については、次のとおりである。

志立は、慶応元（1865）年6月9日に、旧松江藩士・志立範蔵の二男として、島根県松江市で誕生する（『昭和戦前財界人名大事典』1993、大空社）。

明治18（1885）年に東京大学予備門文科（向陵駒場同窓会『会員名簿』昭和40年）を経て、明治22年7月に、帝国大学政治学科を卒業する。同年同月に、日本銀行に入行し、翌明治23年6月より明治26年10月までの3年5カ月の期間「日本銀行の命により欧米に留学」する。後の、大正2（1913）年2月より大正7年2月までの5年間、日本興業銀行の総裁に在任している（日本興業銀行本店広報室）。

講道館柔道への入門は、帝国大学に在学中の明治21（1888）年6月28日であり、翌年の明治22年5月に初段、明治38年8月20日に三段に昇段している（講道館データ管理課。『講道館館員名簿・第一』発行所、年月日不記載）。すなわち、欧米留学の1年ほど前・卒業の直前に初段に昇段したことになる。実は、志立が柔道の修業を開始したのは、講道館に入門した時点からでなく、少なくとも帝国大学に在学・在学以前であることが分かる。なぜなら、東京大学の校内に剣術と柔術の道場が新設されたのは明治20年のことであり、そこに講道館より西郷四郎が指導者として派遣され、この修業者の中に、志立鉄次郎の名前を見いだすことができるからである（老松信一『柔道百年』時事通信社、昭和45年、55ページ参照）。

したがって、講演当時の志立は、柔道の修業期間が少なくとも足掛け3年はあるし初段であることからして、技法などの実力と知識をそれなりに有していた、といえよう。

- *2) ロンドン日本協会は、1892（明治25）年1月28日に、日本の現状とこれまでの経済、生活、芸術、科学、産業事情など、日本に関するすべての研究を奨励することを目的として、ロンドンで設立された。

この設立総会が、1892年4月29日にロンドンのアデルフィのジョーン街にある芸術協会ホールにおいて、243名の出席の下で午後8時30分より開催された。

この総会で、志立鉄次郎は、呉大五郎を助手として「柔術・柔道論」について、実演を伴った講演をした。

この講演のテーマと掲載雑誌名は、次のとおりで、この翻訳である。

T. Shidachi, "JU-JITSU: The Ancient Art of Self-Defence by Sleight of Body". *Transaction and Proceeding of the Japan Society*, London, Vol. 1, pp. 4-21, 1893.

ただし文中には、志立の講演内容や『サタデー・レビュー』の記事などのほかに、講演後の①志立への謝辞、②講演についての会員からの感想、③会員に対する事務連絡、④1862（文久2）年6月6日に写された初代の駐英公使・寺島宗則と鎌倉大仏の写真および日本の七つの掛け物の展示が講演会場でなされていたことなどが、15ページから17ページにかけて記述されている。しかし、この①～④は、志

立の論文に直接的な関わりがないので、訳出することを省略した。

- *3) 志立の発表当時の日本協会における理事会の構成は、理事長、副理事長、会計、図書担当各1名、理事5名、名誉幹事2名の計11名、となっている。この時期の、ARTHUR DIÓSYの役職名は、幹事でなく名誉幹事、となっている (*Transaction and Proceeding of the Japan Society, London, Vol. 1, 1893, p. iii.*)。
- *4) 現在、陳元賛の墓は、名古屋市の平和公園に移された建中寺の墓地にある。建中寺境内には、大正2年3月に徳川義親題額による「既白陳先生碑」が建立されている。
- *5) この地震は、明治24(1891)年10月28日に発生し、美濃と尾張地方を中心として大被害を与えた濃尾地震のことである。
- *6) 幕末当時の柔術家で、日本第一等強い門下を持っていたのは戸塚彦助であった(老松信一、前掲書、51ページ)。
- *7) third year of Bunkin は誤記で、前後の文章からすると Bunkin でなく、Bun-kyu (文久) であろう。
- *8) このページ数は、図4の記事が原文で記載されている箇所を示している。訳文では、12ページ。
- *9) 呉大五郎の経歴については、現在までのところよく分かっていない。
「外務省資料館」の調査・資料によると、彼は、明治19年6月12日に外務省職員になり、明治21年3月にロンドンへの赴任の発令を受け、明治27年1月26日に帰朝が命じられるまでの足掛け7年間をイギリスに滞在した。
また、『日本協会紀要・第一巻(英文)、1893』の会員名簿によると、彼の肩書きは、日本総領事館一等書記官とある。帰国後の、明治28年11月13日に辞職願が提出されている。ちなみに、吉田光邦氏は、この Daigoro Goh を、郷大五郎とし、肩書きを総領事とされている (『両洋の眼』朝日新聞社、1978年、201ページ)。
- *10) 8ストーンは、約54キログラム。14ストーンは、約89キログラム。19ストーンは、約121キログラムに換算できる。
- *11) 約48畳。
- *12) 3ページの訳を下に掲げる。
「志立は、日本協会名誉幹事・呉氏を助手として、実演を伴った講演をした。志立は、いとも簡単に肩越しに呉氏を投げ、相手を負かすいくつかの技法を示範した。絞技とその蘇生法も示された。いくつかの技法が機敏に示され、実演の終了時には、志立と呉のタキシードがほんの少し乱れたのみであった。」〔*Transaction and Proceeding of the Japan Society, London, Vol. 1, 1893, p. 3.* の訳である。〕

〔付記〕 この翻訳は、かなり以前にその下訳ができていた。それ以降、時間的に余裕のある年には、体育実技柔道クラスの受講生とおもしろい箇所を部分的に講読してきた。しかし、筆者・志立鉄次郎の経歴や登場人物の漢字化に不明な部分が多くあったことも重なり、公表を控えてきた。

最近、「東海武道学会」会誌に「英文に見る最古の柔術論」というタイトルの小稿を寄稿したことにより、再びすべてのページにわたって入念な見直しをした。

本文には、思わぬ誤訳や訳語の違いなどが散見されるだろう。この点、先学諸氏のご教示とご叱正を乞い、後日の礎としたい。

現在においても、筆者の経歴・柔道歴や人名の漢字化に不明なところがあるが、取り敢えず「仮訳」として公表し、他日を期したい。